学舎人

vol.03
August 2021
第 3 号

一般社団法人和合館工学舎 情報誌［がくしゃじん］

特集：ビッグデータは地域建設業を救う？

［巻頭言］ 地域建設業って？

［会員紹介］ 株式会社 中村組

特集

ビッグデータは地域建設業を救う？

近年の書店や新聞記事で繰り返し話題とされてきた事柄の一つは、ビッグデータと人工知能でしょう。また、Society 5.0とDXなどの言葉が最近の内閣府や国土交通省から発表される様々な資料のキーワードとして度々登場します。最近のビッグデータと人工知能への期待感は、1980年代後半の情報化社会の到来直前の期待感と重なると感じてられる方が多いのではないでしょうか。情報化社会の到来が予言されるようになってから数年したところで、GUIを備えたパーソナルコンピュータが発売され、誰もが情報化社会の到来を実感したと思います。

ここで、当時の情報化社会に何を期待したのかを考えてみましょう。おそらく業種に依らずに期待したことは「生産性」の向上だったのではないでしょうか。情報化社会が生産性を向上させたかどうかは、情報化社会の到来前後での労働時間などを調べることで推測できます。1970年代から最近にかけての労働時間の推移を調べてみると、大きな変化はありません。実は、この結果は、平均労働時間の変化がなかったことを示すもので、1970年代と2010年代での労働時間の階級の内訳を見ると、労働時間が10時間以上となる階級が明らかに増加しています。

少し乱暴な論かもしれませんが、情報化社会は生産性を向上させなかったように見えます。しかし、本当に情報化社会は生産性の向上に貢献しなかったのでしょうか。コンピュータを用いた一つ一つの作業を思い返すと、人力による作業よりも遥かに多く作業ができることを誰もが認めるでしょう。しかし、コンピュータが不得手な作業にまでコンピュータを用いたり、コンピュータ同士で完結すべき作業の間にヒトが介在すると、コンピュータの本来の生産性は大幅に損なわれます。そう、コンピュータは万能ではないのです。この20年、コンピュータの使い方を誤ってきたことにそろそろ気づきたいところです。

ビッグデータと人工知能は、その特性を理解した上で用いれば、産業革命に匹敵する生産性の向上が期待できます。ビッグデータなどに対して藁をもすがる思いで向き合うのではなく、まず、地域建設業において「解くべき問い」（以下、「イッシュ」）を吟味すべきでしょう。次に、それらのイッシュの解決法を考えましょう。そして、時代錯誤の手続きをやめるなども解決法の一つに加えた上で、人工知能が得意とする課題解決にのみにこれを適用したいものです。人工知能に盲目的な期待をせず、技術者が人工知能の導入の場面をしっかり見極めて活用することで、地域建設業と日本を元気にしましょう。

Think Active😉.

安田 浩保
新潟大学　研究教授